

G/R  
白雲軒

# とりぬ



32

昭和49年10月1日

宗教法人  
鳥居観音

## もみじまつり 10月中旬～11月下旬

白雲山境内のもみじはいろいろな種類のもみじが散在して、年と共に成長してその美しい色は天下一品になりました。11月中見ることが出来ますので、弁当水筒などご持参で1日たのしく探勝してください、又庫裡に湯茶など用意もご致しますから、ご気らくにお立ちより下さい。

### 目次

表紙 紅葉と大観音	
道光禅師御法話(其の十五)	一
インドネシアの旅路(其の六)	五
西遊記(其の二七)	八
田舎医者(其の十二)	一三
見川鯛山	一三
奉納報告と勧進	一六
鳥居観音だより	一七



道光禪師

(故高階瓏仙貌下)

御法話

(其の十五)

### 禪と本性の徹見

一休和尚のような、人の意表にでる活作略もやることのできるに相違ありません。しかし、それは枝末のことで、そんな悟りの副産物みたいなものを望んで、坐禪をいたしたのでは、悟りともあいへたること益々遠くなるばかりであります。

しからば、悟りとはなんであるか、それはただ一言にしてつきています。すなわち「自己の本性を徹見する」、これがすなわち悟りであります。円覚經に、

「ひとたび本心を見れば、永く生死を超ゆ、大智光明、遍く法界を照す」と、あります。

ひとたび自己の本心本性、すなわち、仏心を徹見

することができれば、煩惱妄想のかたまりであるこの身が、そのまま仏となり、罪惡衆穢のこの娑婆世界が、功德莊嚴の極樂世界に変わるといふのです。

文字にかかれた經文を読むと、たいそうむづかしいように思いますが、要は、自己の本性である仏心を見きわめさえすれば、生死の苦惱をはなれて、しあわせになれるといふのです。前には、生死即涅槃という大安心の立場から、有限の生命が、無限の仏のおんいのちに、つながると申しましたが、こんどは我見我執といつて、自分中心にばかりものごとを考えていることをやめて、自他のシキリを取りはずして見ると、そこには広々とした世界がひらけ、仏心があらわれてきます。このようすを、道元禪師は、「自己の身心、他己の身心をして、脱落せしむるなり」と示しておられます。

仏心にめぐめてみれば、他もまた己れであります。したがって、他を排せきして、自分一人のわがままを通そうとはしません。他の苦しみを、他人ごとだと黙ってはおれません。自己が自己を忘れて、他己

に没入しています。このとき、自もなく他もなくなつて、法界(宇宙)をつくしているわけでありませう。つけ飾りの財産や地位や家柄でなく、それ自身のもつ仏心のねうちが、光ってくるのであります。お互いの光と光が照しあうところに、明るいなごやかな世界が、社会で、家庭でひらけてくるのであります。

### 仏心のめざめ

これも昔ばなしであります。備前(岡山県)の池田藩の領分に、兄弟で親の財産を守つて、長年かかつて解決のできない訴訟事件がありました。代々の郡奉行も、これにはほとほと困つて、藩主の光政侯に申し上げますと、侯は思う仔細ありとて、儒臣の泉八右エ門に申しつけられました。

八右エ門は、郡奉行の名代として、この裁判をさばくことになつて、きたる何日、身(わし)の邸に出頭すべき旨を兄弟に達しました。兄弟の者、兄は弟にまけじ、弟は兄にまけじと、早朝から出頭いたしますと、八右エ門は兩人を、一室にひかえさせて

冬の寒い日に、火鉢をまん中においてありますが、兩人は顔を合わすのがいやですから、火鉢のそばへもよらず、かべの方に向かつていて、一語も発せず、正午どきとなりました。そこへ鄭重なお膳が出て、兄弟向い合わせにおかれましたが、顔を合わすのがいやですから、お膳にも向かわず、ジツとかべの方を向いて、夕暮になりました。夕飯もまたその通りで、腹がへつてしかたがないのですが、顔をみるのも腹が立つと、しんぼうして、一刻すぎ、二刻すぎ、夜はだんだんとふけ、寒さはますますひどくなりましたが、一向にお呼び出しがありません。

兩人は、もはや、しんぼうしきれず、うしろ向きになつたまま、次第々々に火鉢のそばにより、ついに顔を合わせ、手をかざすにいたりました。もとより仲のわるい二人、口もきかず、黙つて火鉢にあたつていますが、帰れともいわれなければ、呼びだしの気配もありません。二人はつらつら今回の訴訟事件を思い

「ああ、両親のいたときは、兄弟仲よくこのよう

に、火針にあたつて、おもしろく話し合いもしたのが、フトした心から、たがいに争うにいたつた。思えばつまらぬことであつた。」

と兄も思えば、弟も思い、ついに弟の方から、

「兄さん」

といえ、兄の方からも、

「弟よ」

と呼びかけ、涙を流して、

「わしは少しも、もらわなくてもよいから、この訟訴はとりさげようではないか」

といひます

「いいえ、私が変わつたのですから、兄さんの分になさい」

「いや、いや、おまえのものにしなさい」

と親しげに語り合い、兩人、相談して泉先生に、

この訟訴を思いとどまる旨を申しました。泉八右エ門は、

「さては、おまえ方も本心に立ちかへつたのである」と公平にその遺産を兩人にわけ、じゅん、じゅん

ゆんと、人の道を説いて、さしも長かつた訴訟を解決したという話があります。

常に、我見、我欲で味まされている本性の仏心は静かに深く自己を反省するときに、光を放つてくるのであります。

濁りなき 心の水にすむ月は

波もくだけで 光とぞなる

道元禪師のお歌

### 若き世代の人にすすめる

青少年諸君が将来世に出て有為の人として働かれるには、まず自分を造るといふことが先決であります。それにはいろいろ智育的勉強も必要であります。私の申し上げたいことは、むかしの人でも、現在の人でも、有名な人の逸話や、伝記などを読んでそのなかから自分の崇拜する人物あるいは、あやかりたい人物を見出して、それを自分が将来すすむ目標人物として、常に念頭に持つといふことです。

すなわち、ああいう人になりたいという理想的目

標の人を持つことです。

そうして、それには植物でいえば、それを発育させるには肥料を施さなければならぬように、人もりっぱに育つには、やはり人間に要する肥料が重要です。それがすなわち人間の教育であり、教養であります。

そのなかにあって、精神的肥料としては、古い言葉にきこえるかも知れませんが、なんといっても道徳と宗教であります。

道徳といっても、現代にそわぬ道徳をすすめるのではありません。ここで申し上げたい道徳とは、陰徳をつむことを、心がけるといふことであります。それと、正しい宗教心を持つといふことです。

私は宗教人でありますから、この面をぜひおすすめていただきます。

陰徳がなぜ必要であるかといえますと、人前をかざるような道徳ぶりは、虚飾うそしよであります。虚栄であることが多くて、真心から発するものでなく、とかく偽善がざん的に流れるのであります。

しかし、陰徳は人が知ろうと知るまいと、誉められようが誉められまいが、世のため、人のためにせずにはおられなくて、善い行ないをすることです。それは真心の流露するものでありますから、常にその陰徳行為を喜んでするような良心の人間で、ありたいと教えたものであります。

それから宗教は青少年の人には感受性が縁遠い。それは宗教に対する誤解があるのと、淫祀邪教的な迷信で、人を誤らせる不良性のものを見たり聞いたりするからであるうと思えます。

ことに仏教に対しては、ただちに人間の死に対する教えであるように連想するため、青少年にかえりみられないのであるように思えます。しかし真理を教える仏教は、浄化指導が原則ですから、世界を浄化すること、そのためには、世界を形成している人間を浄化すること、それには第一には人の心を浄化することを原則としていなのです。そこで人間が向上するには、まず精神浄化からすることです。

そこに指導原理があるのであります。(以下次号)



ヤシの葉で包んだドリヤンの店



ドリヤンをかこんで



くさいドリヤンを食べているところ

自動車か  
らおりると  
ドリヤン独  
特の強烈な  
悪臭が先づ  
鼻をつきま  
す。早速割  
つてくれま  
したが誰も  
鼻をつまん  
でドリヤン  
に食いつき  
ません。私  
は勇気を出

熱帯地の珍しい果物　ドリヤン  
ジャバの植物園見物の帰路、ドリヤンを売ってい  
る店に立寄ってみました。



# インドネシアの旅

(其の六)

終稿

八十三翁

桐江

し鼻をつまんでかぶりつきました処、何とも言えない独特の風味に酔いましてなるほど「女房を質においても食べ度い」と言われるだけあって、たしかに果物の王様です。

又この魅力にとりつかれて移住して来る人もあるそうです。

併し妻や娘達は一寸なめただけでこの珍果の真味をあぢわえないとはかわいそうです。皆は私が意地になって食べたのだと今もドリヤンの話が出るとそう云います。

この臭いが甚しいため自動車やホテルに持込む事は禁じられております。

日本でも買ってみましたが悪臭もあまりなく独特の風味は全くありませんでした。

## うどんの失敗

ジャバ島で、ブーゲンベリアの美しい花の下の食堂で果物の専門料理を味いました。色々の果物をテ

ンブラにしたり、甘く煮たり、焼いたりして、数種類も出されて珍らしく大満足でした。ところがメニューに、うどん、と云うのがあり注文しましたらスープの中に肉団子が二つあるだけなので、まちがえたのだと思って又注文した処、同じスープでした。アッコは日本ではなかったと大笑いでした。熱帯国だけあって果物は何十種もあり、皆珍らしいのですが、特においしかったのは、ドリヤン、マンゴー、マンゴスチン、プリンビク、其他二三種位のものでした。パイアは毎日お茶がわりに、どこでももぎたてを先づ出されますが、とてもおいしく何度食べても食べあきません。辛いものや肉食をしない私等老人は果物のおかげで大助かりでした。

## スカルノ大統領と鹿の彫刻

スカルノ大統領は、ポルトガルの支配から独立せしめたが、末路は気の毒な英雄でした。同氏が昭和三十五年に来日の折、大映の永田社長に土産とし



て、高サ一・四米の鹿の親子の木彫を寄贈されたものを、永田社長から鳥居観音に奉納されたので、今鳥居文庫に納まっております。なかなか見事なインドネシア独特の彫刻です。

### 旅行記の思い出

私は二十五年前、米国に三カ月の旅行をしました。各地で必ず、開教師を訪ねて、米国に於ける仏教事情を見聞しましたが、其の後ビルマとタイ国の世界仏教徒大会に二回出席したのを始め、東南亜の仏教国や、インドには三回も行きパキスタン、アフガニスタンのガンダーラ仏跡も巡拝し、尚、中近東



親子鹿の木彫

や地中海沿岸諸国のモハメット、キリスト、ユダヤギリシャ、拝火等の各宗教、殊にエジプトやアラブ地区の数千年前の大陽崇拜の遺跡等を巡拝しましたが、之等は皆、鳥居観音の建立様式に大変役立ちました。

この各旅行記を、この、とりゐ、に十数回に亘り、簡単に連載致しましたのは、私が見聞した各国の宗教の一部でも記録に残し度いためでして長い間御愛読下された事にお礼を申上げて、旅行記を終ります。

合掌



# 西遊記

(其の二七)

岡部千三

悟空の底知れない智恵とその働きによって、助けられた法師は

「ごくろうだった。お礼をいうよ」と涙を流さんばかりにお礼のことばをのべた。

「おししようさま、わたしもやくにたつことがあるでしょう。だから破門なんていけません」

悟空は、すこしいばってみた。

「けれども、ほんとうは、敵の宝もののおかげでかつことができたのです。ごらんください、これがぶんどった宝ものですよ」

まほうのひょうたん、まほうのなわ、ばしう扇を、ずらりならべてみせた。

「これが、人をすいこむのか、ふーん」と八戒がひょうたんをつかもうとした。

「あぶないぞ、その中には、銀角がはいっている。あけると、お前の耳にくいつくぞ」

「えっ、それはいけない、やめた」

八戒は、びっくりして、その手をはなした。

ほら穴には、たくさんのたべものがおいてあったので、みんな、おなががすいていたので、おいしくて、もうだれもがいったべた。

あくる日になって、のこりのけらいをあつめて、やってきた金角が、ときの声をあげて、せめよせたが、こちらには宝ものがある。そのうえ、悟空、八戒、悟浄が、力をあわせてたたかったので、金角はさんさんのまけいくさになって、にげだした。

「金角」

うしろから、悟空がよびかけた。

「おう」と金角が返事をした。

すると、まほうのひょうたんに、するすると、すいこまれてしまった。

そのとき、天下の太上老君が、すがたをあらわして大きな声で云った。

「三蔵法師、悟空も八戒も悟浄もきけ、こんどのことは、おまえたちの力をためしたまでのこと、まアよくたつた。これからも、もつとつらいこと、くるしいことがあつても、まけてはならぬぞ、力をあわせてたたかいぬき、天竺へたどりついて、経文をしつかりとつてくるのだよ」

「はっ」と法師は、うづくまつてこたえた。

老君は、ひょうたんをふつて、金角と銀角をたました。ふたりは子どもにかわつていた。

「法師よ、この者たちは、もともと天上にいた、わたしの召使の子どもだ、もとの天上へつれていくぞ」

老君は、ふたりを左右にしたがつて、しずかに、空へのぼつていった。

### 坊さんをいじめる国

それからまた。法師たちは、西へ西へと旅をつづけ、しゃち国という国へついたときのことである。

「えんやこら、どっこいしよ」

おおぜいの人のかけ声が、どこからかきこえてくる。こじきのようなみなりをした坊さん達が、石や木を山のようにつんだ車を、汗だくになつて引いたり、おしたりしている。

そのそばに、きれいなみなりをした若い道士が二人、のんびりと、このようすを見ていた。

「みんながはたらいているのに、若い者が見物しているとはけしからん。なにかわけがあるのだからうきいてみよう」と悟空は、若い道士のそばへ近づいてたずねてみた。

「たいへんな石や木ですなあ。これは、いったい何をつくるのですか」

すると、若い道士はこう云つた。

「あたらしい寺をたてるのです、いろいろわけがありましてな。二十年前に、このしゃち国にひでりがつづいて、田畑の作物は枯れる、人はのみ水もないという、ひどいことがありました。国じゅうの坊さんたちに、雨ごいをさせたのですが、すこしもききめがありません。そのとき、虎力仙人、鹿力仙人

羊力仙人という、三人の仙人があらわれて、雨ごいをしましたところ、どっと大雨がふって、人も作物も生きかえったのでございます。こんど、三人の仙人のために、あたらしい寺をたてることになり、雨ごいにしっぱいした坊さんたちを、そのぼつとして、はたらかせることにしました。ところが、みんななまけてはたらかしません。わたしたちが、こうして見はりをしていて、なまけ者をはげますためです」

「なるほど、……」と悟空は、感心した。

「わたしは遠くから、親類の者を見つげにきたのです。ひょっとすると、このおおぜいの中にいるかも知れません。この人達の顔を見て、さがしてもよるしいでしょうか」

こういって、ひとりひとりの顔を見てまわった。

だれを見ても、つかれたような、ようすで、ふうふうとくるしそうないきをしていた。虎力、鹿力、羊力の仙人には、これがわからないだろうか、わかつていて、人をくるしめるとすれば、仙人とはうそで、ほんとうはわるいものにちがいない、と悟空は

そこへ気がついたのである。はたらく坊さんたちをたすけ、ばけものをこらしてやろうと考えた。

「なぜにげないのです。こんなにむりなしごとをする、からだがいってしまいましょうに」

見はりの道士にはきこえないように、こっそりと云った。

「できればそうしたいと思っています。でも、とてもとてもにげられません、それがわかれば、ひどいめにあわされますからね」

「なあに、わたしがうまくやってあげますよ」

悟空は、見はりの道士にむかって、

「顔を見たところが、これはみんなわたしの親類ですよ。むりなしごとは、やめさせてくださいよ」

とこわい声で云った。

「ばかな……。五百人もいる者が、みんな親類だなんて、うそだ、うそ、うそにきまっている」と見はりの道士はいいかえした。

「うそではない」

「うそだ」

悟空と道士の口あらそいになって、気のみじかい  
悟空は、いつまでも口だけではおさまらない。

「めんどうだ、わたしのいうことを信じなければ  
これだ」と云いながら、

悟空は、例の如意棒をとりだして、するするとの  
ばし、ぶんぶんとうりまわした。

道士はびっくりして、どんどん逃けて行った。

悟空は、車をひいている坊さんたちのところへい  
って、じぶんの毛をむしりとって、一本ずつわたし  
て、早口にいった。

「この毛をくすり指にまきつけなさい。そして、  
はやくどこかへかくれて、もしだれかきたら、『齊  
天大聖』とよぶのですよ。齊天大聖というのは、こ  
れこのわたしだ。すぐにたすけにきてあげる」

「はいはい。よろしく」と、坊さんたちは、車を  
おいてきぼりにして、木のかけ、くさむらの中にめ  
いめいが、かくれていった。

「これでよしと、だんだんおもしろくなるぞ」  
悟空は、にこにこしながら、とくいになって、法

師のところへもどっていった。

その晩、法師とでしたちは、町はずれの小さなお  
寺にとまった

夜ふけに、悟空は、笛やたいこの音で、めをさま  
した。

「はて、なんの音だろう」と、すぐさま空におど  
り上って、南のほうをながめると、きらきらあかり  
がかがやいて、その下に、おおぜいの道士がいて、  
星祭りをしているところだった。虎力、鹿力、羊力  
の三仙人は、いちばん高いところにいばっていた。

「おい、おい」と悟空は、寺にもどって、悟浄と  
八戒をゆりおこした。

「すてきな星祭りがはじまっている。おそなえも  
のごちそうが、たくさんある。どうだい、いって  
みないか？」

ごちそうときくと、じっとしていられない八戒、  
悟浄のふたりだ、すぐさまとびおきて、悟空といっ  
しよに、南の空へとんでいった。

あかりの下のごちそうを見た八戒が、

「ありがたい。ありがたい。さっそくいたただこう」と、とびおりようとすると、あわてて悟空がとめて、

「すがたをみられてはまずいぞ、まず、こうしてからだ」といって、ふうっとひといきふくと、急に風がでて、あかりを消した。するとあたりがまっくらやみになった。

「ややっ、ふしぎな風だ、あやしい風だ」

虎力仙人は、すっと立ちあがった。そして、

「今夜の祭りは、これでおわりにする。あとはあしたにしよう」

鹿力仙人も、羊力仙人も、虎力仙人につづいて、どこともなく行ってしまった。

悟空たちは、だれもない祭だんへおりて、見ると、木でつくった神様が祭つてある。それをわきへおき、自分たちがこそにすわり、手あたり次第に、むしや、むしやたべてしまった。

そこへひとりの道士が、わすれていた銀の鈴をとりにきた。あたりがくらくらいたため鈴が見あたらない。

手さぐりでさがしていると、すべって、どすんと、しりもちをついてしまった。

「わははは」と八戒が、大声でわらいだした。

道士は、おどろいて、あわててもときた道へにげかえって、「祭だんに誰かいます。わたしがころんだのをみて、わらいました」と声ふるわせながら、知らせた。

それとばかりに、虎力、鹿力、羊力の三仙人とけらいたちは、手に手に武器をもち、あかりを高々とかがげて、まっしぐらに、祭だんめがけて、かけつけてくるようす……。

「やってくるぞ、だが、いまあらそってはまずいたたかいはあすにのぼそう。八戒も悟浄も、さっさとすがたをかくせ」

悟空は、ふたりをいそがせて、きんと丸雲のつて、法師のいる寺へもどって行った。法師は、そんなことは知らずもうねむっていた。「おまえたちもねるんだ、お師匠さまにさとられないように。……として自分も床にもぐった。

(以下次号)



## 田舎医者（其の十二）

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

その時、私の一人置いて隣りにいた衛生課長が身をのり出してそっと私にささやいた。

「すげえ女だな先生。奴の亭主はどんなだべ？」

「気の毒だね」

身につまされて私が云ったら、間に坐ってた紳士が痰のからまったかすれ声でかすかに云った。

「私がその……あれの亭主なんです」

遠くサイレンが鳴った。やっとお昼だ。私はにこにこしながら、弁当を開き、口で割箸をプチンと割った。

### 貴公子

裸の柿のてっぺんに、干からびた実が一つだけ残り、小鳥が代わるがわるきて突っついていった。

なんべんか霜が降りた。秋はすっかり終わった。

元県会議員、白井勇作老人の広大な屋しきは白壁の高い塀で囲まれ、正面の門からは長い石畳の路を通ってはいる。だが村ではケチンボ屋しきと呼んでいる。

ある日、郵便屋が赤い自転車ッキョッキョとふんでこの門をくぐってきた。

「外国からの手紙だ、村じゃ初めてだ。やっばりこの家は偉いだな」

と、彼が配達した封書は部厚かった。

「どこのだれからだ？」

「おれただの郵便屋だ、読めるはずねえです、でも、あて名ははれ、漢字で隠居さんあてだ、中身も日本語だべさ、きつと、……」

外国からのその手紙は、しかも達筆で、とてもたいへんなことを知らせてきたのだった。

曰井勇作老人には弟があった。名を勇造といった。彼は若かったころ百姓を嫌って町の遊びをおぼえ、放蕩をつくし、家を追われた。五十年前のことだった。彼は北海道で最後の消息を断った。

外国からの手紙は勇造のせがれが南米からよこしたものであった。それによると、勇造は大正五年移民団に加わり、単身ブラジルへ移住し、そこで日本の嫁を迎えた。夫婦は血みどろで働き、やがて自分たちの手で農園を経営するようになった。そして数十年、彼らは成功し巨万の富を作ったのだが、去年ついに他界したというのだ。

そして、勇造には遺言があった。

一、遺骨を故郷の曰井家歴代の墓地へ埋葬すると、この費用一万ドル

二、村に曰井公民館を設立して、広く部落民の福祉を計ること、この費用二万ドル

三、曰井奨学資金を設けて、村内の優良生徒を毎

年一名ずつ大学まで進学せしむること、この費用二万ドル

右 五万ドルを兄勇作又はその後継者に託し、運

営のいっさいを委ねること。

追記

孫、ジョウジ曰井は右の金円を日本へ持参し曰井家に留まりてよき配偶者を求め探し、この地に連れ帰るべきこと。

右、御世話こい願う御本家への土産金として更に一万ドルを計上のこと。

勇作老人は、とりわけ追記の部分が気に入った。だからなんべんも読みかえして、そのつど、愉快で愉快でしかたがないのだ。

——おみやげ、三百六十万円——

嫁だらあるぞ、松子でも、竹子でも、梅子だっていい！

孫はどれでも適齡期だ、おあつらえむぎというもんだ。うまい話だこれは……！



だが、この老人は爆発しそうな喜びをぐっと腹のそこ押えつけ、できるだけ渋い顔をつくって郵便屋にいった。

「あの馬鹿めが、死んでからまでわしにやっかいをかけおる……」

噂が村じゅうに広がっていった。郵便屋が一軒一軒くばって歩いたのだ。

白井家の白い門を、村長や教育長や坊様が日になんべんも忙しくぐぐった。町の洋裁学校から長女の孫娘が呼びもどされ、真赤なセーターの胸をゆさぶりながら石畳の路をはいっていった。次女は町の洋食屋へ西洋料理を習いにいった。三女の高校生は英語の勉強に身を入れはじめた。

離れ座敷の畳替えもすんだ、真白い障子の部屋は床の間の菊と畳の青さが、いっばいに薫り、外国の客人を持てなすにふさわしかった。

緊急村議会が連日開かれた。新しい公民館建設の場所と設計と入札と……会場では激しい議論がとび散ったが、白井勇作老人は真中の椅子にすわって目

をつぶり、深く静かに考えていた。

——この際、よく考えねえと、わしは取りかえしのつかねえ間違いをやらかしそうだ、問題はだ、どこのとこでいくらピンをはねるかだ……。

坊様は墨染めの衣を新調した。彼はたすぎがけの法衣にもんべをはいて、御仏のほこりをたたき、ごしごしこすって金色に光らせ、一万ドルの葬式に備えた。

——一万ドルといえば、それは三百と、六十万だぞたぶん……。衣の長い袖の中で彼は指を折って何ども何ども教えてみた。

またたく間に村の道すじが整とんざれ、清められ、見違えるほどの美しさになった。

その日、クリーム色のシボレーが門の前で静かにとまり三世ジョウジ白井が降りてきた。彼は貴公子だった。縁なしのめがねをかけ、折り目正しい洋服を着て、そこから香水がぱつと匂った。みとれるほどの美男子に、娘たちが不意に驚きの声を発した。

(以下次号)

# 壹万體観音奉納者芳名

第十七集  
五月より七月  
まで  
敬称略

住所	芳名	住所	芳名
入間市	原 やえ子	目黒区	若林とく
川越	大河原友作	青梅	並木藤太郎
調布市	石井貞秋	世田谷区	齊田田鶴子
所沢	平田善七	小川町	岡本登久子
〃	小畑晴彦	中野区	大館幸江
〃	小遠民一	愛知県	龍谷寺
〃	山崎栄一	川越	小久保千代男
〃	三上庄一	大宮	猪瀬文雄
入間市	増村 栄 <sup>とおる</sup>	大里郡	田尻昌利
熊谷	大館寿衛吉	戸田市	秋本春美
〃	田代隆知	秩父市	関根次郎
〃	粕谷幸平	入間市	吉田健
〃	村山ミサ	府中市	秋元博
〃	小畑昇	川越	梶田武
〃	沢田とみ	杉並区	森みさを
越	芳野一	入間市	水野喬

住所	芳名	小計
柏市	杉村英治	三五体
狭山市	六本木初代	
〃	永井喜一	八、四一六体
累計		

## 壹万巻写経者芳名 第六集

(昭和四九年自五月至七月)

横山 吾郎	2	北牧惠美子	2
脇本 敬子	2	霜田ふみ子	2
佐久間真治	2	滝田トキ	3
岡部 茂	2	宮原 兼一	2
国府方金佳	2	長島 陵華	6
山崎二三枝	2	長島 時子	2
守屋 いち	2	横山 吾朗	5
斉藤とよ子	3	牧野 陽子	2
川野辺マツヨ	2	間瀬 良平	5
綱島 き貝	2	八木 雅子	2
長沢 はる	2	古瀬 文一	2
小計	七八	内訳(巻以上七)	七
累計	七、二二〇巻		

壹万體観音及万巻納経のご供養は日拜致し、尚春  
秋大祭と両彼岸には盛大に執行いたします。

## 諸寄進、諸奉安の勸進

当山、境内地の諸施設に対し、広く篤信者各位から、お手厚いご芳志を賜りますおかげをもちまして、色々の施設がなされて参りました。

このように信仰によせられます、多くの方々のご芳情にいつも甘えながら恐縮いたしております。

しかしながら、広域にわたっている境内といたしますと、まだまだ、将来へかけて、種々な施策もなさなければ完全とは申せません。

したがいまして、今後尚一そうのご協力を賜りますよう、謹んで御礼と併せておねがいを申し上げます。次第でございます。

### 老万體観音奉安の勸進

現在八、四一六体  
老体老万円(A)と七千円(B)に改正になりました。  
老万體観音一体につき仏壇用小観音一体をさし上げます

### 老万卷写経奉納の勸進

現在七、二二〇卷  
老巻 千円に改正されました。

### 参道大灯ろう寄進の勸進

老基拾参万円(鉛板挿入)  
すでに四十基の御奉納がありました、尚引続きお願い申し上げます。

### 地球愛護 地球儀 平和観音建設費の勸進

今までに参百五拾万円の御奉納がありました。  
今卒浄財を賜りますよう御願いたします。

今秋上棟式を執行の計画で、すでに工事は進められております。

場所 大黒殿の奥、見晴し台地

構造 鉄筋、高さ十五米、地球儀直径五・五米

平和観音の高さ、三・五米

地球の浄化、人類の平和、そして世界の平和招来へ、その理想は、限りなくひろがります。

### 鳥居観音だより

終った行事と、来山状況

花を愛で、春をたのしむ季節も終って、全山が新緑におおわれた、五月は健康づくりと、みどりを親む人々で連日賑わった。

五月五日、子供の日は家族ぐるみの来山が多く、飲物、弁当等持って山内の広場樹かげで、ゆっくりと、昼餉をとりながら、だんらんの時をすごされた。

五月六日、東京福徴講、新妻治郎様ご一行、深谷市の大野様等来山。

五月七日、東松山市のあづま会ご一行来山。

五月八日、安田生命板橋店の高橋様ご一行と、板橋の榎本みや子様ご一行、清瀬市の堀沢様等ご来山  
五月九日、所沢市、所沢観音講、小山権之丞様ご一行と、フリーの来山多数。

五月十日、朝霞市、広瀬秀雄様ご来山。

五月十二日、飯能市、小川文雄様、納経にご来山

五月十七日、月例法要、十時より執行。

五月十九日、入間市、豊岡講、粕谷様ご一行来山

五月二十日、東京、江崎元堂様ご一行ご来山、経文字入観者像の扁額奉納、本堂に掲ぐ。

五月二十三日、大宮市、北野中学校生徒二百余名来山。

五月二十六日、目黒、近藤斧市様ご一行の祈禱と

清水市、松田江畔先生ご一行ご来山、二日間にあわって、書道の研修をなさった。

五月二十九日、当山、監事、武居藤吉、平沼幸一の両氏により、昭和四十八年度の監査が、午後二時から庫裡二階に於て行われ、四時終了した。

六月一日、飯能市、畑福寿講、植竹様ご一行来山

七月四日、東京、国府方金佳様ご一行ご来山、本堂に於てご熱心に一同読経、礼拝をなさった。

七月十三日、狭山市、井上竹吉様より塔婆供養のお申込多数受付。

六月十五日、中野、田辺さわ様より、塔婆供養多数のお申込あり。

六月二十三日、坂戸町、若松様来山、塔婆供養のお申込あり。

六月二十六日、開祖平沼先生ご夫妻、京都、奈良方面へ、鐘の研究視察のためご出発、尚これより先阪東三十三観音の巡拝もしておられ、結願の日も間近い。

六月二十八日、平沼先生ご夫妻、視察終了ご帰宅

七月二日、当山護持会役員、町田仲太郎様が春の叙勲に、勲五等瑞宝章の受章祝賀会を飯能に開催されるに当り、平沼先生もご出席になり、お祝いのあいさつをのべられた。

七月三日、東京、清瀬市堀沢様来山、塔婆供養のお申込あり。

七月六日、東京、福徴講、新妻様より塔婆供養のお申込あり。

七月九日、目黒講、若林様より塔婆供養申込あり

七月十日、江崎様より塔婆供養お申込あり。

七月十一日、東京、鈴木様より流灯法要に三〇名が一泊で参加の申し込みあり。

七月十二日、朝霞市、広瀬様より塔婆お申込あり

七月十六日、塔婆施餓鬼供養会、午後二時より、第二回の塔婆供養を執行、お申し込み塔婆は四百余本、大観音、堂宇内、阿弥陀如来様の前には夏野菜が供えられ、それを囲み、供養塔婆が立てられてその上から、うつくしい施餓鬼旗がつるされて、まことに夏の宗教行事にふさわしい感を深くした。

導師は、小林老師、有馬老師によってげんしゆくに進められた。

参列者は、東京、福徴講、新妻治郎様ご一行と、狭山市の六本木様等に関係者で、読経や各自焼香。

塔婆供養につづいて、堂宇内の尊像並に一万体観音の法要も読経と共に一巡されながら執行、午後三時終了した。

七月十七日

午前十時より

当山役員会開

催、代表役員

に岡部千三、

責任役員に小

林高安氏選任

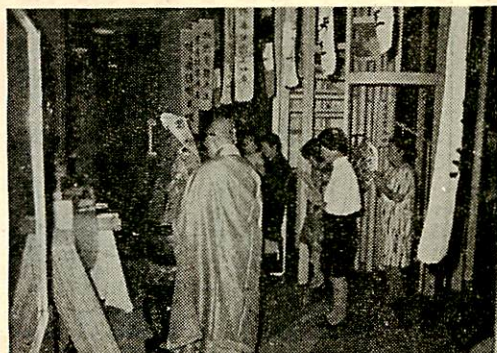
護持会役員に

小山権之丞、

水上清氏選任

さる。

続いて昭和



七月十六日の塔婆供養

四十八年度行事並に決算報告承認。

昭和四十九年度行事計画並に予算審議可決。

午後三時終了、散会。

七月二十四日、東京、野口徹三郎様（八〇才）ご来山。

本堂に於て、亡ご夫人のご供養をなさつて、庫裡で少憩後、秩父へ向われた。

八月十六日、

午後五時本堂で流灯法要、七時より名栗川へ流灯、その数千五百灯、八時より花火大会、盆おどり大会が展開観衆千数百人。



八月十六日の流灯法要

### 観音様のご利益を受けた人々

○青梅、某電気商の奥さんは観音様が夢枕に立たれた。早速来山、参拝以来毎年一月参拝、商売繁昌中  
○蕨市の、大泉さんは安産のお願いをかけておかれた。予定通りご安産でお子様のご成長もよくて以来毎年春にはご参拝になって、気安く庫裡で過される  
○福徴講の新妻様は人のお世話が上手で、縁結びのお願いは必ず当山にご本人を伴つて来山されます  
又成就しますと、それが次々に宣伝されて、婚期を迎えるご婦人の、ご参拝、ご祈禱が増加しました。  
○当山本堂下に霊泉と云われている樋がある。四季を通じて絶えることがない。この霊泉は病氣平癒不老長寿によいと云われています。お祈りして、一升びんにいただいて行かれる人が沢山あります。

とりゝ 第三十二号 発行日 昭和四十九年十月一日  
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三  
発行人 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社  
印刷所  
発行所 鳥居観音電話〇四二九七〇四 名栗二七五番



## これからの行事ご案内

### 玄装三蔵塔と大観音法要

とき 11月10日 11時より

紅葉が真盛りとなりますので、ご参拝かたがたご来山ください。

### 秋 季 例 大 祭

とき 11月17日 10時30分

本堂にて秋季例法要を執行します。

### 地球愛護平和観音上棟式

とき 11月17日 11時30分

白雲山の秋色は絶頂となる例大祭に併せて、平和観音の上棟式を執行します。

建設地 大黒殿頂上見晴し台

高 さ 15m 地球球直径 5m 平和観音 3.5m

平和観音は手に持つびんから霊水を地球に注いで地球上の汚れを浄めると云うまさに地球上の人類の苦難から救い度いと云う意表である。

### 大 黒 天 例 祭

とき 12月10日 10時30分

### 新年祈禱のご案内

とき 昭和50年1月1日～3日 10時

祈禱料 1千円～2千円～3千円以上

家内安全・交通安全・安産・商売繁昌・当病平癒・試験合格

申 込 白雲山鳥居観音事務所

御蔭様で毎年盛大になって参りました。(1,500本謹修)